

何をなぜ情報化するの？

松嶋 隆二

日本の産業、経済の再活性化の契機は、「情報技術(IT)」、「情報化」であるという議論がマスコミ、政府、経済界では盛んである。現在、日本では携帯電話の普及が一段落すると同時に、「ITバブル」がはじけ、不況は一段と深刻化しているという。

新しい産業としての携帯電話事業はおくとして、ある時、携帯電話が意外な使われ方をしている、大変驚いたことがある。電車の中で、二人の聾啞者が隣がけで座り、それぞれが、携帯電話のキーを盛んに押していた。そして時々、顔を見合わせて笑いあっていた。

しばらく観察していると、彼らにとって最も得意な手話は従たるコミュニケーション手段になっている、携帯メールでのやり取りと、直接的な face-to-face の情緒的、感情的交流が表面に現れていた。携帯電話については、社会的に負の側面が強調されるが、このほほえましい風景は当方が遭遇した携帯電話の有効活用の例として、大変印象的であった。

手話は一つの言語であるといわれるほどにはっきりしたルールを持ったコミュニケーション手段であるが、あえて、それを使わず、面倒なボタン押しを嫌がりもせず、なぜ携帯メールをわざわざ使うのか不思議に思ったものであった。手間をかけてメッセージを文字に変換して情報をやり取りするという手段を聾啞者があえて選んでいる事の中にどのような心理的規制が働いているのかを知ることは、情報やメッセージをやり取りする事の意味を考える上で興味深い研究テーマのように思われる。

ところで、世は「情報化」社会へと、そして、「教育の情報化」などあらゆる事柄が「情報化」されてゆくことが望ましいという風潮に溢れている。私は、この「情報化」という言葉を聞くたびに、その意味する内容が何なのかと不思議に思ってきた。もし、情報化という言葉が、様々な媒体を介して入手したものを、読み、聴き、匂いをかぎ、味わい、触る、そして、鑑賞するというように、あらゆる人間活動にかかわるものを「電子データ化」するということを意味するのであれば、情報化という言葉は、誤った使い方と思われる。なぜなら、情報化された情報がどこかに存在しなければならないが、当方の理解では情報は符号化と解読の規則と一体になって始めて我々に理解できるものになるのであって、それらと独立したものとして情報を理解することはできない。

「情報化」という言葉は、最近使われだした言葉で、私にとってなじみのないものである。あえてその語の意味をくみとろうとすると、ものそのものや事柄、それらの振る舞い等を、記号、言語、あるいは、数式によって表現可能とし、符号化(encoding)と解読(decoding)の規則を明らかにする営みを意味しているとしたかと思えない。たとえば、名画を電子データ化するとき、色の再現性はどのように確保するのか、コンピューターディスプレイのような発光体によって、反射光を見ることによって感じている色をどれだけ正確に再現出来るかを明らかにすることが、情報化と思っていた。それが実現し、個人が自由にそれらにアクセスしていつでも鑑賞できる状況をつくり、教育や研究等に活用できるようにすることは、情報化ではなく、情報へのアクセシビリティを高めることであると思われる。データに対して符号化と解読規則を柔軟に適応出来ないため、従来の固定電話では不可能であった事が、新しいネットワークシステムでは、いとも簡単に出来るしまうことの衝撃があったために、情報化というよくわからない言葉が発明されたのではとったりしている。

このように考えてくると、世間が情報化といっていることは、ネットワークを介してやり取り可能となった「社会的に意味のあるコンテンツや機能」を指しているのではないかと思われる。しかもその中には、「出会い系サイト」と呼ばれる人物紹介サイトのようなもの、ネットワークで「オークションを実現するサイト」なども含まれているらしい。これらはコンピューター・ネットワークが普及する以前の社会で、ヒトとヒトとの出会いの機会を設けることを目的とした営利、非営利の組織や団体が行ってきた事である。それをコンピューター・ネットワーク上で実現したのが、「出会い系サイト」を始めとする様々なサイトであるが、それらは、モデルとなった既存のものよりアクセスが容易になっており、心理的負担がなくなっている。この心理的負担は、その社会的機能の発揮にとって負の側面であるという認

識があるように思われ、それらを取り除いたものが「出会い系サイト」や「ネット・オークション」である。しかし、アクセスが容易で心理的負担を感じなくすることは、様々な行動を起こす前に人々が通常行う行動選択の意味の確認や吟味の機会を奪っている。たとえば、コンピューター・ネットワークを介したやり取りは、匿名性の高い状況と類似しており、そのことがヒトの行動の自律的選択や統制にかなりの影響を与えているに違いない。このことは、行動の自律的選択、自覚的選択が、自己の行動に対する「レスポンシビティー」の感覚を支えている一要素であるという心理学的研究から見ても明らかである。

このように、情報化とは様々な組織や機関が提供している社会的機能やサービスを電子化して、ネットワークを通じて「いつでも、どこでも」それらを利用できるようにすることということであると理解するのが、実情を最も表しているように思われる。そのような情報化社会で提供されている機能やサービスには安易な「ヒトとヒトとの出会い」があたり前で、危険のないものと、若い人たちに思い込ませるようなものはいくらでもある。その意味で、我々は情報化ということのもたらす心理的・社会的インパクトに敏感にならなければならないし、それに対し警鐘を鳴らす必要があると思われる。「何を、なぜ、どのように情報化するの」という問いをいつも持つておくことが大切ではないかと考える。

ところで、大学コミュニティが「いつでも、どこでも」というユビキタス社会に一步も二歩も近づくためには、「情報化」ということの持つ問題点に配慮しながら、何をどのようにというコンテンツ面だけでなく、ハード面では、(1)情報コンセントがいたるところにあること、または、高速大容量無線 LAN が利用できることと、(2)全ての学生、教職員が携帯型情報端末やウェアラブル・コンピューターを持っていることが必要である。

もし、大学における教育・研究に関連する活動のほぼ全てで使えるような機能をもつ携帯型情報端末が開発され、利用できるようになると、教育の形態が大幅に変わる可能性がある。恐らく、face-to-face の会話、質疑、議論に割く時間と機会が、学生と教員との間で増えてくると思われる。大学における教育活動にネットワークなど現代の情報技術を活用しなければならないという圧力はますます大きくなってゆくと思うが、ハード的な面だけでなく、どのような形でコンテンツを整理し学生に提供するか？ 文字情報で提供しても有効か、画像や動画、シミュレーションなどをどのように電子化教材に組み込むかなどを今から具体的に研究しておく必要がある。今後あからさまに社会から様々な批判、要望、要求に大学はさらされると思われるが、先端的な学内情報基盤を備えているということ以上に、それらをどのように学内の諸活動において利用出来ているのかということが問題にされると予想されるので、大学コミュニティの諸活動において何をどんな風に情報化してゆくのかを、今から真剣に検討しておくことが大切であると考えられる。